

キーワード:

火の見櫓
保存活用
風景デザイン
設計
まちなかアートギャラリー

抄録

富士川の久保田農園内に立つ火の見櫓を題材に、未来に残すためにどのようなことができるのかを考え、提案し、設計の発想の一例を富士宮市でおこなわれたまちなかアートにて発表。火の見櫓の現地調査、文献調査等から得られた情報を分析し、そのランドマーク的価値、デザインの価値を見直すとともに、保存活用の道を探ってみる。

1. はじめに

かつて地域防災に大きな役割を果たしてきた「火の見櫓」、現在はその役目も終え、地域からその存在は失われつつある。しかし、「火の見櫓」の価値は地域防災のシンボリック的価値があるだけでなく、地域の風景としてのランドマーク的価値、建築のデザイン的価値など、歴史的文化的価値は大きく、機能は失ってもその存在価値はまだまだ大きいものと考えられる。

今回、富士宮市で毎年行われている「ふじのみや・まちなかアートギャラリー」への出展の機会を得た。展示空間のテーマは「昭和」。そこで、昭和の懐かしい風景の要素のひとつでもある「火の見櫓」をテーマにした作品を出展。具体的には、県内で確認できた「火の見櫓」996基を紹介するとともに、その存在価値を見直し、新たな活用について提案した。

2. 火の見櫓について

火の見櫓が誕生したのは、江戸時代に起きた明暦の大火（1657）と言われており、その後全国に普及していったが、その多くは明治に入ってからであり、最盛期は昭和30年代頃と考えられている。

「火の見櫓」の目的は、地域防災であり、庶民による自衛消防であり、火災が起きた際にいち早く住民を伝えることを第一の目的としている。建築物が木造で火災に弱く、伝達手段が限られていた時代の中、「火の見櫓」は日本固有の構築物として存在し、住民に安心安全を伝え続けていたのである。

しかし、建築物の不燃化や高層ビル化、火災報知システムの普及により、「火の見櫓」はその役割を失っていき、その存在が忘れられていくようになる。

地域防災の役割を担っていた「火の見櫓」だが、その存在価値は大きく、地域のシンボリック的価値の他、地域の風景としてのランドマーク的価値、建築のデザイン的価値などを有していた。地域のシンボリック的価値とは、地域の人たちが生活の安全安心をめざして各集落に建てられていたことを考えると、コミュニティのシンボルとして存在していたことは間違いのない事実から

である。

ランドマーク的価値、デザインの価値というのは、「火の見櫓」が地域コミュニティの中心にあることが多く、その地域を見守ることを主として建てられており、半鐘の音が聞こえる範囲、かつ見渡すことができる範囲に建てられていることから、ランドマーク的な存在であるといえる。そして、火の見櫓を造っているのは、地元の鉄工所であり、標準的な形があるものの、その鉄工所の手仕事によるデザイン的な違いが見られるのも特徴のひとつである。

日本ユネスコ協会連盟もまたその価値を認め、2016年末に地域の豊かな自然や文化を100年後の子どもたちに残すための活動に対して贈る『プロジェクト未来遺産』に、「火の見櫓」に関する活動を登録しており、火の見櫓の価値を再確認するよい機会となっている。

3. 形の分類、地域性、多様性について

火の見櫓は、形で分類してみると、櫓型と梯子型、その中間の櫓梯子型に大別できる。櫓型はだいたい10m以上の高さがあり、3、4本の柱によって構成され、見張台と屋根を支えている。梯子型は5m以下の高さのものが多く、2から4本の柱で建てられており、見張台はない。櫓型は平地や街なかによく見られ、梯子型は山間部に多く見られるが、これは、火の見櫓の音を伝播するという目的が理由と考えられる。

また、火の見櫓を構成する頭頂部、屋根、見張台にも、さまざまなデザインを見ることができ、それらの組合せ方でさらにさまざまな形状を見ることができ、各形状においては、地域の特性を見ることができ、たとえば屋根にむくりのあるタイプは磐田市に多く見られ、三角屋根や方形屋根のシンプルな形のは川根町に多く見られる。「火の見櫓」は機能的にはみな同じであっても、つくる人、職人の手仕事の構法により、実に多くの多様性が生み出されている。つくり手は各地域ごとの職人であるため、そのデザインは自ずと地域に根差したデザインが生み出されていくことになる。一見、どの火の見櫓も同じデザインと思われがちだが、同じようなデザインであってもよく見ると

微妙な差異があることもおもしろさのひとつである。

4. ユネスコ未来遺産運動について

日本ユネスコ協会連盟が2009年から始めた「未来遺産運動」とは、地域文化や自然遺産を未来に伝えていこうとする活動に対して、それを推進する地域を支援し応援しようという仕組みである。プロジェクト未来遺産は公募で選ばれる。応募条件は「原則として2年以上の活動実績があること」「非営利団体であること」「地域の人々が主体となって運営していること」の3つ。2009年から毎年、3から10のプロジェクトが登録されている。

火の見櫓の活動が登録されたのは2016年12月であり、第8回「プロジェクト未来遺産2016」として登録されている。「火の見櫓」をコミュニティの連帯の象徴として新たに地域のシンボルとして位置づけ、安全遺産として継承していく点が評価された結果だった。また将来的に全国的な「火の見櫓」ネットワークの形成を目指し、子供たちの社会学習やシンポジウム等の次世代への普及活動も行っている点も評価された。

5. 保存・活用の必要性について

かつて火の見櫓からまちづくりを考える会は、「火の見櫓は「遺産」か「ゴミ」か」という調査報告書をまとめ上げている。このタイトルのように、火の見櫓は果たして「遺産」なのか「ゴミ」なのかは大きな課題である。

ユネスコ未来遺産運動に登録されたことから、火の見櫓は決して「ゴミ」などではなく、未来に残すべき「遺産」なのである。建築の果たすべき役割は機能だけではない。存在そのものにも意味がある。ただし、ただ建っているだけではその意味はなかなか伝わらない。そこに新たな活用方法を見出していく必要がある。

「火の見櫓からまちづくりを考える会」とは別の団体で、「櫓 an」という団体がある。平成16年に地元の若者で構成された団体で、火の見櫓を使い、何か新しい地域おこしができないかと様々な活動を行っている団体である。

櫓 an は旧富士川町にある久保田農園内の火の見櫓を活用し、ライトアップしてクリスマスイベントを開催したり、たくさんのこいのぼりを火の見櫓からたなびかせてみるイベントを開催したり、流しそうめん等のふれあいイベントを開催したりと、将来、地域の中心となる子供たちに、自然の大切さや文化歴史を伝えるイベントを数多く開催している。これはほんの一例ではあるが、このように火の見櫓を保存活用することで未来につなげていく活動の存在は大変興味深い。

6. 久保田農園内に立つ火の見櫓

旧富士川町にある久保田農園、その園内には無上祭というCaféもあり、多くの人が訪れる憩いの場にもなっており、Caféから東南東に30mほど離れた位置に火の見櫓が建っている。その立ち姿は、高さ約20mほど、見張台は2段になっており、屋根は八角形のやや丸みを帯びている。白色に塗装され、やや傾斜した敷地の先には富士山が見え、周りは緑に囲まれており、風景に溶け込みつつもその存在感を示し、凛とした姿を見せてくれている。

この火の見櫓は最初からここに建てられていたわけではない。もともとは富士川町岩淵字塘内に昭和26年に建設されたものである。総高18.5m、工費34万円だったという。そのすぐそばには消防第2分団も建設されていた。その後、第2分団は移転し、平成11年12月に地震対策のため解体撤去されてしまう。それを久保田農園の久保田隆義氏が撤去と同時に譲り受け保管。それを「櫓 an」のメンバーが再建を計画し、翌17年2月に再建、現在に至っている。この「火の見櫓」は、平成18年3月に国登録有形文化財に指定されている。またこの場所は、プロジェクト未来遺産の活動の主な拠点にもなっている。

今回の「ふじのみや・まちなかアートギャラリー」に出展した作品では、この久保田農園内の火の見櫓をモデルとして考え、他の火の見櫓でも同様に展開できるような活用方法を試みている。



久保田農園内 café 無上祭と火の見櫓



久保田農園内 火の見櫓

7. ふじのみや・まちなかアートギャラリーについて

「ふじのみや・まちなかアートギャラリー」とは、富士山本宮浅間大社の東西、富士宮駅から西富士宮駅の間にある6つの商店街（駅前通り商店街、中央商店会、マイロード本町、神田通り商店街、大社通り宮町、西町商店街）で開かれるアートギャラリーで、総勢50名以上の作品が60ヶ所以上の各商店街の店舗に展示され、富士宮の町全体が芸術空間に変わる企画である。今年で15回目を迎え、6月16(金)から25日(日)の10日間開催された。期間中はワークショップやグルメイベントなどもあり、いつもと違う雰囲気を楽しむことができる。

今回私が出展する場所は、西富士宮駅に近い西町商店街の「くぬぎ」という場所で、濃い赤茶色の外壁が目立つ2階建ての1階部分（10畳ほど）が展示スペースであった。ここは現在空き店舗となっており、「Do Arts Fujisan」という富士富士宮を中心とした作家集団の展示場所として使用することになり、私もそのうちの一人として出展した。

「ふじのみや・まちなかアートギャラリー」では、全体に共通するテーマは決められておらず、各自それぞれの自由な作品の展示が可能であるが、今回私が出展する場合は、「Do arts Fujisan」としてのグループ展示でもあるため、展示テーマが「昭和」と決められていた。そこに出席する人数は20人ほどで、出展者の中には個人で別の場所に同時出展されている方もいる。

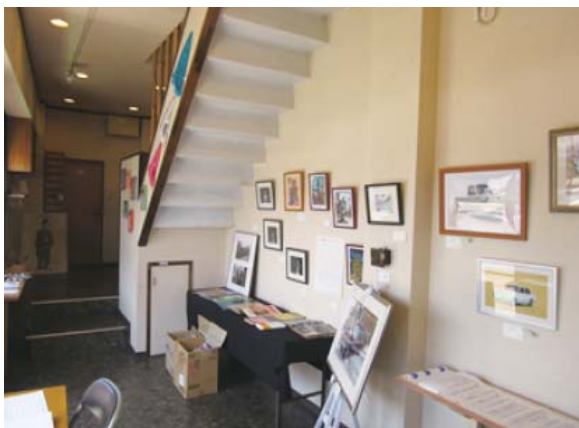
「昭和」というテーマから、私は、昭和のまちの風景には欠かせない存在だった「火の見櫓」を展示しようと思い、未来につなげる提案をしてみたいと思った。未来に昭和をつなげてみたいと思った。



けやき 外部



展示場所 けやき



けやき 内部



けやき 内部

第15回 ふじのみや・まちなか アートギャラリー

Machinaka Art Gallery in Fujinomiya
2017.6.16(金)~6.25(日)



主催:ふじのみや・まちなかアートギャラリー実行委員会
問い合わせ:富士宮商工会議所 tel.0544-26-3101

まちなかアートギャラリー チラシ

8. 活用案について

「火の見櫓」を展示するにあたり、まず、2000年から火の見櫓からまちづくりを考える会(私も会の一員)として調査を進め確認できた県内の「火の見櫓」1016基のうち996基の写真をA1サイズのパネル2枚にすべて並べ展示することにした。この中には現存するものもあれば、解体されすでに失くなったものも含まれている。

いざ並べてみると、いかに地域に根付いた存在であるのか、こんなにも多くが各地域に存在していたのかということがよくわかる。また、先にも述べたようなヴァリエーションの豊富さも見ることができる。そして、どの風景にも「昭和」の懐かしい雰囲気漂っていて、写真を見た年配の方々は、懐かしい、子供の頃を思い出す、などと話していた。

現在火の見櫓がその機能を失ってしまっているのは事実であり、機能としては平成の現代においては不要となってしまったものばかりであるが、その存在理由、伝えるべきことすべてを失ったわけではないと思っている。では、そのようなものをどのように残したらよいのだろうか、どう活用したらよいのだろうか。私はそこまでを含めた展示をしたいと考えた。

保存活用するためには、過去も現在も変わらぬ本質を未来に伝えることが重要であり、また、そこに新たな機能を追加する必要がある。

過去も現在もそして未来も変わらぬ本質とは何か、それは「火」と「人間」のつながりである。まちの安

心安全を見守るシンボルとして立っていた「火の見櫓」、いつの時代であっても、どこに立っていても、そこには「火の用心」というキーワードが含まれていたはずである。それはこの先も変わらない本質である。

明かりを灯すとき、食事をするとき、お風呂に入るとき、暖をとるとき、「火」と「人間」は人間が誕生してからずっと密接な関係にあった。「火」は私たち「人間」にとって、とても大切なものである。が、時として「火」は火事などにより人間を苦しめてしまうことがある。現代は過去に比べれば火事は非常に少なくなっている。そして、現代のわれわれの生活は、LEDの明かりのもと、燃えにくい素材に囲まれ、IHで料理をし、電気で沸かしたお風呂に入っている。現代の「火」と「人間」の関係は過去に比べ希薄になってしまっている。しかし、いつの時代であろうと、火への感謝、火への畏怖は忘れてはならない。「人間」は「火」なしで生きていくことなどできないのだから。それはこの先未来もずっとである。「火の見櫓」には、「火の用心」という永遠のテーマと類のない歴史的文化的価値を含んでいる以上、このことを伝える役割がある。

シンボリック価値を見直し、ランドマーク的価値を取り戻し、かつてまちの中心にあった火の見櫓のように、人が集える場として生まれ変わらせてみたらどうだろうと考えた。火の見櫓を中心に薄い膜を張ってスペースをつくり、その下に人が集える場をつくるというのはどうだろう。火に感謝し、火を楽しむ場、同時に火への畏怖も感じられる場所を想像、設計してみた。

「火の見櫓」が新たな価値を得れば、今までと違って見えるはずである。次の世代にも受け継ぐことができ、歴史をつなげることができると考えた。

「火の見櫓」を使い、「火」をテーマにしたオープンなコミュニティスペース、新たな風景デザインの計画である。

参考文献：

- ・火の見櫓からまちづくりを考える会『火の見櫓 地域を見つめる安全遺産』鹿島出版会、2010
- ・火の見櫓からまちづくりを考える会『火の見櫓は「遺産」か「ゴミ」か』火の見櫓からまちづくりを考える会、2005

謝辞：

本研究に伴う調査は、「火の見櫓からまちづくりを考える会」が行っている。この会の塩見寛、土屋和男、杉山留美、和田厚、小澤義一、加藤ひろみ、梶山理加、関戸未帆子の各氏に感謝する。図35 土屋公雄 掲載
<http://www.kimio-tsuchiya.com/works/images/1990-1994/p55.jpg>



作品 1-A



作品 1-B



作品 2